



発達障害当事者としての私の特性は、病院図書館員としての適性でもあるか？

ヒラメ

I. はじめに

定型発達の人々と発達障害当事者の私とは、世界との接しかたが肺呼吸とエラ呼吸ほど異なるのではないかと思う。肺呼吸の人は陸地を歩き回りながら体内の器官で酸素を取り込んでいるが、エラ呼吸の者は全身を水中に閉じ込めることでようやく空気を得て生き延びている。我ながら何とも奇妙で不自由だが、生まれついた構造なので仕方がない。

私は病院図書館の中であればこそ生きられる。言わば、医学情報といういささかマニアックな対象を載せた活字に全身を浸すことで、辛うじて世界との接点を得て生存している。22歳が寿命だと決め込んでいた私が倍の年齢まで生きながらえることができ、しかもそのことを喜べるのは、ひとえにこの仕事と出会った信じ難いほどの幸運によるものだ。

そんな（とても変な）私が、自分の発達障害当事者としての特性は病院図書館員としての適性であると言えるかどうかを考えた。以下に詳述する。

ただし、この文章はあくまで私個人についての実感を記述したものである。客観性が乏しいことと、発達障害の当事者も定型発達の方々と同じく人それぞれであり、他の当事者の方には文中の記述が当てはまらない部分が多々あると予想されることを前提とする。

なお、諸事情により勤務先では一部を除いて

自分の障害を公表していない。そのため、この文章は筆名で書いた。お許しをいただきたい。

II. 発達障害とは

まず、発達障害について簡単に記載する。

大きな特徴は、

1. 社会性（人とのかかわり方）の特徴
一人とのつきあい方のルールや社会の常識がわかりにくい
2. コミュニケーションの特徴
一ことばでのやりとりや、ことば以外でのやりとりが全般的に苦手
3. 想像力（切り替え・応用力）の特徴
一推測する力がうまく働かないため、気持ちを切りかえることや日課の変更が苦手の三点である。これらの特徴は知的障害を伴うとは限らない。また、感覚に敏感さや鈍感さを持つ当事者もある^{1,2)}。

なお、私はDSM-IVでいう「特定不能の広汎性発達障害」であると39歳の時に診断された。その後、42歳の時にはADHD（注意欠陥多動性障害）の傾向があるという指摘も受けた。

III. 職場としての病院図書館の特徴

病院図書館の特徴として、山田³⁾と奥出⁴⁾は下記の事柄を挙げている。

1. 担当者が少人数、もしくはワンパーソン・ライブラリーであることが多い
2. 院内の他部署とのコミュニケーションが重要である
3. 他の病院図書館や、別の館種の図書館との

ひらめ：とある病院図書館

flatfishpddnos@gmail.com

ネットワークを持つことによって業務が成り立っている

IV. 発達障害当事者としての私の特性は病院図書館員としての適性であるか否か

森⁵⁾は司書としての適性の例として下記 10 項目を引用している。

1. 不規則な勤務時間でも働けるか。
2. 毎日の決まりきった仕事に耐えられるか。
3. 人びとと会話をし、物事を説明するのが好きか。
4. 本に興味があるか。
5. 利用者がいらいらしたり、あなたをうんざりさせても冷静でいられるか。
6. 組織的な行動ができるか。
7. 一人だけで働けるか。
8. 事務的な仕事もできるか。
9. 責任感があるか。
10. 重たい本をあつかえるか。

以下、各項目に関する一当事者本人としての実感を、Ⅲ. で挙げた事柄や心理検査 (WAIS-Ⅲと P-F スタディ) による私の所見詳細の記載をまじえて述べる。

1. 睡眠などの生活リズムが狂うとてきめん体調を崩すため、シフト制の図書館であれば勤務は不可能だ。今いる病院図書館は勤務時間が毎日一定なので、私でも働ける。
2. 仕事が決まりきっているからこそ耐えられる。これは発達障害当事者の強みと言えそう。
3. 言語聴覚士であり発達障害当事者でもある村上⁶⁾は「多くの専門書には自閉症は人と関わるのが苦手だと書かれています。(中略) しかし少数派ですが、中には人について関心やこだわりを持つ人もいます。自分やほかの当事者と関わった経験から感じています。」「人に専門知識を教えたりアドバイスをする仕事ならある程度接客があってもできることがあると思っています。」と述

べている。

私もここ言われている「できることがある」者なのではないかと思う。私の場合は、人びとと図書館や本について会話をし、本や情報の探しかたについて説明することであればできる。このことは私にとって極めて限られた世界との接点なので、好きでないなら何と表現すれば良いのかわからない。

ただし、私の心理検査所見詳細には「対人理解は不得手」とある。利用者の望まない説明を一方的にしているだけかもしれないという懸念は残る。

4. 本というより、本の中に収められている情報に興味がある。本がページの間に持つ情報を、まさに必要としている人の手にできるだけうまく届けようとあれこれ企むことが、とても興味深く思える。

この志向を自分が持っていることに気がついたのは、病院図書館で働き始めてからだった。興味の対象の中に意図せず飛び込んでいるとは、実に幸せな本人である。

5. 主観的には、人から感情を害されることに恐怖がある。誰か一人に嫌われているように思うことで、この世の全てを敵に回しているような取り返しがつかない感じを持ち、慌てふためくこともある。

WAIS-Ⅲの所見詳細によれば「他者の感情や意図には意識が向きにくく」、P-F スタディの所見詳細によれば「自身のフラストレーションを解消するために、相手への配慮に乏しい対応をしたり (中略) 客観的にみると行き過ぎた行動をとろうとする傾向もみられ」とのことだ。どうも私は対人関係において相当に自己中心的であるらしい。

いずれにしても、利用者と感情的に噛み合わない場合は冷静でいることが不可能だ。このため、トラブルがあった場合には事務的な対応ができる立場の上司を頼ることが

多い。おそらく負担をかけてしまっているだろう。

6. 病院という組織の中で他部署と連携を取ることであれば、自分の居心地の良さを確保しながらこちらの希望が通るように振る舞うずるさは、歳を食ったおかげで身につけていると思う。頼みごとをする相手の選択や依頼の切り出しかた、その内容のまとめかたや必要性を理由づける方法、相手の都合がつかない場合に折衷案を見つける方法などから下した自己評価である。
7. プライベートな雑談が極端に（本当に吐いてしまうほど）苦手なので、ワンパーソン・ライブラリーであるからこそ働ける。一人だけでしか働けないことは私の致命的な弱点だが、病院図書館員としてなら重要な強みに転化する。

自力で解決できない業務上の疑問を抱えた場合は、病院図書館員の SNS に投稿してアドバイスを頂くことが多い。これにより、とても強い助力を得ている。一人だけで働いていても司書としての技術の上で困ることがないのはこのおかげであることを明記する。

ただ、自館の全体像を把握し、大局を見通してさまざまな業務をバランス良くこなすことは絶望的に不得意である。この点を支えてくれる相棒がいないのはとても厳しい。現状では、利用者や図書館運営委員会の方々からご要望やお叱りを受けたり、自分で気がついた不具合をかかりつけの病院で相談したりすることで業務の優先順位をつけている。
8. 書類のファイリングや物の整理整頓が壊滅的に苦手で、正直なところ仕事に支障を来してしまっている。最近始めた服薬が奏効しているらしく、少しずつ片づいてきてはいるが、WAIS-Ⅲの所見に現れた処理速度の低さを何かにつけて痛感する。

パソコンの操作はどうかできるため、

機械に助けってもらって何とか事務的な仕事をしているような気がする。

9. 前述した所見「自身のフラストレーションを解消するために（中略）行き過ぎた行動をとろうとする」にあるような融通の利かなさであれば自信がある。しかし、これを責任感と呼ぶことはできないだろう。
10. 「作業を素早くかつ正確に行うことは苦手」なのは WAIS-Ⅲの所見詳細のとおりである。しかし、粗大運動に障害があるという指摘は受けていない。山積みや箱詰めされた本を運ぶような力仕事であれば人並み程度にこなせているのではないかと思う。

V. 結論

以上からの結論は「発達障害当事者としての私は、病院図書館員の適性と呼べる特性と、病院図書館員の職には適さない特性の両方を持っている」というものである。

発達障害当事者としての私の特性は、必ずしも病院図書館員の適性であるとは言えない。探しものを見つけ出すことに強い興味とわずかな自信があっても、私には病院図書館員として不足している能力があまりにも多し、本と人をつなぐという司書の仕事の基本が本当にうまくできているかさえ疑問だ。病院図書館は私という発達障害当事者が働くために用意された場所では当然ない。

しかし、上述した能力不足や疑問のために今の職場を手放すのは、持って生まれた探しものに対する興味が生かせなくなるのが惜しい。その上、自分の障害由来の特性を弱点でしかないものと認識させられるようで、芸がなくてつまらない。そもそも、世界との接点が失われてしまっても困る。

だから、欠点を取り得で補うために今日も服薬して英気を養い、明日も機嫌良く出勤するのだ。

VI. 終わりに

風変わりな奴であっても、私は病院図書館を預かる司書として責任を果たしたい。発達障害由来の特性が病院図書館員であることにこれ以上差し障りを及ぼさないよう、何をどう努力するべきか、どの人やどのツールやどの薬の力を借りるべきかを、司書としての手法やそれ以外の方法で調べて実行したい。もちろん、特性がプラスに作用する部分は謙虚かつ最大限に生かしたい。

「自分は音楽家になるべきだろうか、とあなたが質問するなら、答えはノーだ。訊ねるなら、ノー。理由は訊ねたから。(中略)もしあなたが本当に望んでいるなら、あなたは音楽家なのだ。誰も止めることはできない⁷⁾」とは、指揮者であり作曲家でもあったレナード・バーンスタインの言葉だという。この伝を借りれば、発達障害の当事者に病院図書館員として働く資格はあるのだろうか、と誰かに確認したくなった時点でゲームオーバーだ。尊敬する同業の方々とは世界との接しかたが根本的に異なっても自分は間違いなく司書である、と私は妄信している。こう思い込むことができってしまうのは、発達障害当事者が病院図書館員でもあるための重要な適性だと考えている。

謝 辞

内容・形式ともに型破りなこの文章を掲載してくださった会誌編集部の皆さま方、一生ついていきます。

必ず幸せにします。

近畿病院図書室協議会会員施設の皆さま方、平素よりたいへんお世話になりまして誠にありがとうございます。今後ともよろしく願いたします。

参考文献

- 1) 吉田友子. ASに関する詳しい説明. あなたがあなたであるために 自分らしく生きるためのアスペルガー症候群ガイド. 東京: 中央法規出版; 2005. p.19-39
- 2) 大阪府福祉部障がい福祉室. ええやんちがっても広汎性発達障がいの理解のために 青年・成人版. 平成25年12月改訂. [引用2017-12-05]
http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/1206/00027606/eeyan_seijin1.pdf (表紙・第1章・第2章・第3章)
http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/1206/00027606/eeyan_seijin2.pdf (第4章・第5章)
- 3) 山田有希子: 病院図書館司書が教える看護文献検索の技 第1回 司書のおしごと. 整形外科看護. 2010;15(4):410-2
- 4) 奥出麻里. ホスピタル・ライブラリアンシップ. 病院図書館の世界 医学情報の進歩と現場のはざままで. 東京: 日外アソシエーツ; 2017. p.125-57
- 5) 森智彦. よい司書になれる可能性とは. 司書・司書教諭になるには. 東京: ぺりかん社; 2002. p.126-7
- 6) 村上由美. 言語聴覚士という仕事から開けた世界. 梅永雄二編著. 仕事がしたい! 発達障害がある人の就労相談. 東京: 明石書店; 2010. p.222-35.
- 7) 九鬼伸夫. おじさんおばさんの会. 記者のち医者ときどき患者. 東京: 朝日新聞社; 1999. p.27-9.